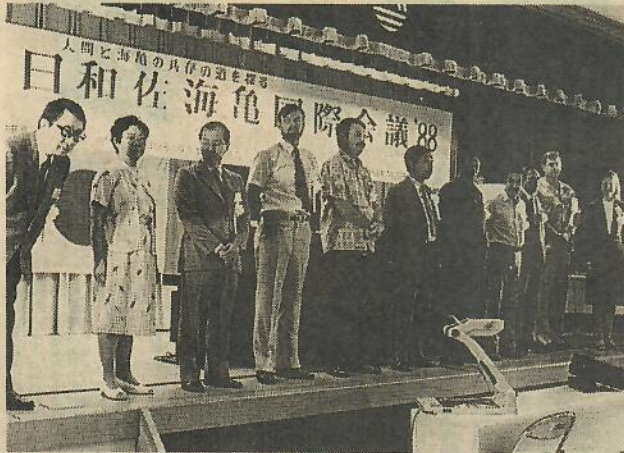


July 31, 1988
HIWASA, JAPAN 彦

第3種郵便物認可

日和佐国際会議が開幕

アジアで初 研究者ら130人が参加



会議前に紹介される海外からの研究者
＝日和佐町公民館

海亀保護へ まず現状報告

人間に乱獲され、環境を破壊されて絶滅の危機にひんしている海亀を地球規模で守ろうと、アジアでは初めての日和佐海亀国際会議88（海部郡日和佐町、兵庫県姫路市、国際自然保護連合・種の保存委員会ウミガメ専門家部会主催）が三十日、日和佐町公民館に海亀研究の世界的な権威十一人はじめ国内の自然保護団体代表、日和佐町民ら百三十人が参加して始まった。「もし海亀が言葉をしゃべれたら、一方的に乱獲する人間に何と云うだろう」との声がしょっぱなから飛び出したが、三日間にわたる報告やパネルディスカッションのあと、今後の保護へ国際協力をうたう日和佐宣言が採択される。

最終日に国際協力宣言

環太平洋九カ国の国旗が立ち並ぶ日和佐町公民館に姿をみせたのは、国際自然保護連合・種の保存委員会ウミガメ専門家部会長を務めるアメリカ女性カレン・ブロンダールさん（フロリダ大学助教授）や日本の海亀研究の第一人者・内田至姫路水族館長ら。

「小さな町で大きな会議を開き、海亀保護の輪を世界に広げたい」と、喜田寛日和佐町長が開会を宣言したあと、内田館長が基調講演。「海部郡海南町浅川の出身者が寛文十年（一六七〇年）小笠原諸島に漂着し、海亀が多く生息していることを幕府に報告している。同じ県南の日和佐が

町挙げて海亀保護に取り組んでいるのが奇妙な縁。小笠原の亀は人口増加に反比例して減少したが、今も日本では自然食アームに乗って卵の盗掘が続き、数は減る一方。もし亀に言葉がしゃべれたら、この現状を何と云うだろう。人間は他の生物を食べて生きなければならぬが一方的に奪うだけでなく、他の生物も富まなければならない」と訴えた。

ブロンダール会長が「海亀は広い範囲で回遊するので、日本野鳥の会県支部（曾良寛武支部長）は三十日、県に對し「徳島市難賀町西開の多々羅川右岸改修工事に着工するが、同地区は国の指定を受けて、ふるさとの川モデル事業の一環として自然観察公園化される場所の隣接地。同公園との整合性や野鳥、昆虫、魚類などのため、現状の川岸をできるだけ残してほしい」と

その保護には国際的な協力態勢が必要」と強調したのに続いて、オーストラリアやインドネシア、アメリカ、中国など研究者九人が現状報告した。

注目されたのはインドネシア。親亀の肉や産みつけられた卵が沿岸住民のタンパク源に乱獲される上、ベッコウの材料となるタイマイ（ベッコウガメ）が大量に日本へ輸出されるため年々亀が減っている。一個の卵も見逃さないという乱獲ぶりに政府もようやく保護へ腰を上げかけたという。亀を料理した場面やプラスチック製品を飲み込んで哀れな末路をたどった亀の写真は、人間の得手勝手さを印象付け、改めて環境保全と海亀保護の大切さを訴えていた。

川辺の自然残して

多々羅 野鳥の会が県に要望
川改修

文書で要望した。改修工事は、旧大松川と多々羅川が合流、川が右側へ曲がる地点を中心に、約一億円で延長約五百六十メートルの間、幅を十メートル程度拡張し、右岸側の護岸をブロック積みする。この日、県河川課を訪れた曾良支部長は「現地は、川岸の樹木、川辺のアシの繁茂など自然景観にすぐれ野鳥の繁